

（県が生んだ大儒学者）

九 安井息軒

安井息軒は、寛政十一年（一七九九年）一月一日、安井槍洲の次男として、清武町に生まれました。

息軒の父親は、村の若者を集め勉強を教えながら、農作業もしていましたが、生活は豊かではありませんでした。そこで、息軒は家のくらしに少しでも役立つようにと畑に出て、家の人たちといっしょに働きました。仕事の合間に、みんなはお茶を飲んだりしていましたが、息軒はひとり腰をおろして一心に本を読みました。また、畑の行き帰りには、くわを肩にかつぎながら、本を読むのが楽しみのひとつでした。

息軒は、小さいころ重い病気にかかって、右の目が不自由になりました。また、いつも古びた野良着（農民が畑で働くときに着る着物）を着て、うつむきかげん

に歩いていました。それで村人たちが悪口を言うこともありませんでした。しかし、息軒は、そんなことにはくじけずに、本を読むことをけっしてやめませんでした。十五歳のときには、家にあるむずかしい漢書（中国の古い歴史の本など）をすべて読みつくしてしまいました。それから、よその家にちがった書物があることを聞くと、その本を借りに行くために、夜道を遠くまで出かけていきました。



貸してもらえないときは、書き写してもって帰って読みました。こうした熱心な勉強の様子を見て、父は、

「畑仕事の手伝いはいいから好きな漢書を読みなさい。」

とやさしく息軒に語りかけました。

このとき息軒は、

（日本一の学者になろう）

と強く心に決めました。

息軒が二十二歳になったときのことです。ますます勉学にはげむ息軒をみて、父は、家族のものと相談のうえ、大阪に出て学問をするようにすすめました。息軒の望みがようやくかなう日がきたのです。

わずかな旅費を手に大阪に来た息軒は、自すいをしながら毎日学問に精を出しました。父からもらったお金を大切に使うため、おかず代を節約することにしました。いろいろ考えたすえ、大豆をしょう油や塩でからく煮つめて食べることにしました。これは、保
ぞん食にもなり、すいじの時間がはぶけるので、その分だけ勉強の時間を多くとること
ができました。

しかし、時間とつかれを忘れた毎日の勉強は、息軒の健康をそこねる原因となりました。医者は息軒の身体を心配して、清武に帰るようにおすすめしました。息軒は少



し迷いましたが、学問を続けることに
しました。

ところが、清武にいる兄がなくなり、
年老いた父母のめんどうをみるため
に、息軒は清武に帰らなければならな
くなりました。

清武に帰った息軒は、子弟の教育にあたりながら、父母のめんどうをみまし
た。しかし、息軒の心は、かつてこころざしを立てた学問への願いが強くなる
ばかりでした。

父の許しもあって、当時わが国の学問の中心となっていた、江戸の昌平しょうへい黌（現
在の東京大学）に入って、さらに学問を続けることができました。

その後は、決して楽しい日ばかりではありませんでした。尊敬していた両親を失っ

たり、常に息軒につくした妻に先立たれたりしました。しかし、こうした不幸にも負けず、一生を学問のためにささげた息軒は、人々から尊敬されるようになり、立派な儒学者（中国の学問を研究する学者）となりました。

息軒をしたって全国から集まった門下生もんかせいの中からは、明治の世をささえた数多くの人々が育ったのです。